

魏晉南朝の司法における情理の語について

佐 藤 達 郎

はじめに

漢代から六朝時代にかけての裁判や司法議論を通観したとき、後漢から魏晉にかけての大きな変化として、「情理」の語がしばしば熟語として、あるいは情・理それぞれが密接に関わりあう語として、用いられ始めることに注目される。

周知のように、清代中国の司法における情理の語に注目し、そこに伝統中国の司法の特質を読み取ったのは滋賀秀三氏であった。氏は清代の幾多の判例を分析するなかで、判決の辞にしばしば現れるこれらの語につき、情Ⅱ「具体的事実関係」「生き身の平凡な人びとの心」「友好的な人間関係」、理Ⅱ「同種の事物には普遍的に妥当するような道理」がともに判決における準拠の一つとして機能していたとされた。⁽¹⁾豊富な事例とともに人間性への確信に裏付けられた氏の高論は、清朝期をモデルとしながらも広く前近代中国の司法の特質を照射して強い説得力をもつ。もとよりその歴史性に関する分析考察は後代に託された課題である⁽²⁾が、先述のように漢魏の際にその語が現れてくるとするなら、中国における司法観念上の画期をそこに見出すことができようし、また進んで、その背景にいかなる思潮・社

會上の変化があるかを考えねばならないであろう。本稿はこうした課題に向けてのささやかな一歩を期するものである。

1. 魏晉南朝の司法における情理の語の諸例

本章ではまず、情理の語が熟語として、ないしは関連しあう二語として用いられている諸例を六朝の正史などから挙げ、それらの語の含意につき検討していきたい。まず漢末から西晋の諸例を挙げる（以下、引用史料は基本的に旧字を用いる）。

①（劉虞）累遷至幽州刺史、轉甘陵相、甚得東土戎狄之心。後以疾歸家、常降身隱約、與邑黨州閭同樂共卹、等齊有無、不以名位自殊、鄉曲咸共宗之。時鄉曲有所訴訟、不以詣吏、自投虞平之。虞以情理爲之論判、皆大小敬從、不以爲恨。（『三國志』公孫瓚傳注引吳書）

②時有投書誹謗者、太祖疾之、欲必知其主。淵請留其本書、而不宣露。其書多引二京賦、淵敕功曹曰、「此郡（魏郡）既大、今在都輦、而少學問者。其簡開解年少、欲遣就師。」功曹差三人、臨遣引見、訓以「所學未及、二京賦、博物之書也、世人忽略、少有其師、可求能讀者從受之。」又密喻旨。旬日得能讀者、遂往受業。吏因請使作箋、比方其書、與投書人同手。收攝案問、具得情理。（『三國志』國淵傳）

③（滕胤）年三十、起家爲丹楊太守、徙吳郡・會稽、所在見稱。（注：吳書曰、胤上表陳及時宜、及民間優劣、多所匡弼。…胤每聽辭訟、斷罪法、察言觀色、務盡情理。人有窮冤悲苦之言、對之流涕。）（『三國志』滕胤傳）

④至惠帝之世、政出群下、每有疑獄、各立私情、刑法不定、獄訟繁滋。尚書裴頠表陳之曰、…昔漢氏有盜廟玉環

者、文帝欲族誅、釋之但處以死刑、曰、「若侵長陵一抔土、何以復加。」文帝從之。大晉垂制、深惟經遠、山陵不封、園邑不飾、墓而不墳、同乎山壤、是以丘阪存其陳草、使齊乎中原矣。雖陵兆尊嚴、唯毀發然後族之、此古典也。若登踐犯損、失盡敬之道、事止刑罪可也。去（元康）八年、奴聽教加誣周龍燒草、廷尉遂奏族龍、一門八口并命。會龍獄翻、然後得免。考之情理、準之前訓、所處實重。（『晉書』刑法志）

①は漢末の動乱期、官を退き郷里にあつて民の信望を得ていた劉虞が、官にかわつて郷民の訴訟を裁定し、その公正さを称えられたことを記す。彼が情理によつて下した論判に皆が敬服したとあり、郷民と苦楽を共にした彼が民衆の心情に精通したうえで、よく衆人に納得のいく裁定を下したことがうかがわれる。すなわちこの情理とは、人心および常識の道理といった謂で解釈されてよいであろう。

同様のニュアンスを、③滕胤伝の情理についても認めることができる。丹陽郡などの太守として社会情勢に即した適確な意見を孫権にしばしば上表した彼は、郡太守としての聴訟においても「言を察し色を覷、務めて情理を尽」くしたといい、供辞による事理の審査とともに、顔色や様子による心情の忖度を併せ用い、事実関係と人心に照らして公正な審判につとめたことが知られる。冤獄に苦しむ人々に涙したという逸話も、そうした彼の公正さへの強い志向を示すものであろう。

④は、やや長めの引用によつて示した通り、山陵の毀損にかかわる議論の一節である。漢代、宮殿陵墓の毀損が皇帝・国家への間接的侵害行為として時に大逆罪に問われたこと、魏晉時代に入るとそれが明確に律上に規定され、唐律における十惡の一つとしての大逆につながっていくことを筆者は前稿で述べたが、この元康八年の事件では山陵の草生の焼損を大逆として族刑に当てる量刑の軽重が問われており、まさにそうした法概念の定着の過渡的状況に対応する議論といえよう。先に「登踐犯損し、尽敬の道を失するが若きは、事、刑罪に止むれば可なり」とあり、また後に

「これを情理に考え、これを前訓に準うるに、処する所実に重し」とあれば、周龍はたまたま陵内の草生を過失により踏み傷つけるなどした―唐律でいえば賊盜律三二条「諸盜園陵内草木者、徒二年半」との条項に該当する行為であろう―ところ、誣告により故意の放火として族刑に当てられたものと思われる。前訓とは先に引かれる前漢の廷尉張釈之の逸話（『史記』張釈之列伝）を指すであろうが、それと対で用いられる情理の情とはこの場合、故意か過失かの心情的動機、いわゆる原情（心）定罪の情ならびに彼が実際に行つた行為内容、理とは事の是非を判する上での道理、といった意味になろう。

②では曹操を誹謗した匿名の投書者をさがすべく、魏郡太守の国淵は諸生に命じて二京賦を誦読せる者を探し出させ、筆跡を調べると同筆であつたため、その者を拘束し取り調べたところ「具さに情理を得」という。この場合の情理とは、事情・経緯・動機および事の整合性（「つじつま」）などの意を有すると思われ、含意必ずしも明確ではないものの、他三例におけるそれらと矛盾はきたさないであろう。

以上四例を通観すれば、魏晉期の司法における情理とは民衆一般の心情・当人の内的心情、またそれらに照らして明らかとなる事実関係（情のもつこの二つの含意の関係については後述する）とその是非を判する道理、といった意味に解することができ、滋賀氏の明らかにされた清代の裁判における用語例と大きくかけ離れないことが確認されよう。情、理が分離して用いられる次の例でも同様であり、情理の語の比較的早い用例として挙げておく。

⑤沛郡有富家公、資二千餘萬、小婦子年裁數歲、頃失其母、又無親近、其大婦女甚不賢。公病困、思念惡聲爭其財、兒判不全、因呼族人爲遺令云、「悉以財屬女、但遺一劍與兒、年十五、以還付之。」其後兒大、姊不肯與劍、男乃詣郡自言求劍。謹案、時太守大司空何武也、得其辭、因錄女及聲、省其手書、顧謂掾史曰、「女性強梁、聲復貪鄙、其父畏賊害其兒、又計小兒正得此財、不能全護、故且俾與女、內實寄之耳、不當以劍與之乎。夫劍者、

亦所以決斷也。限年十五者、度其子智力足以自活、此女豈必不復還其劍、當聞縣官、縣官或能證察、得以見伸展也。凡庸何能思慮強遠如是哉。」悉奪取財以與子、曰、「弊女惡、晉溫飽十五歲、亦以幸矣。」於是論者乃服、謂武原情度事得其理。（『北堂書鈔』卷四四等所引『風俗通』佚文；テキストは王利器『風俗通義校注』に従った。）

話の設定は前漢末期となっているが、この話は『漢書』何武伝には見えず後世の仮託と思われ、ここに見える情・理の語も『風俗通』の編まれた後漢末期の用語法を反映しているのであろう。愚昧貪悪な正嫡の娘夫婦に対し、亡父の意を汲んで妾腹の息子の遺産継承を認めた太守何武の裁きについて「情を原ね事を度り、その理を得」とあり、情・理で明確に對をなしてはいないが、情理の語が定着していく過渡的段階を示しているものと考えられる。

続く東晋南朝時代の裁判關係記事にも、情理が熟語として、もしくは情・理が密に関連しあう語として用いられる例がいくつか見られ、先に結論を言えば、それらの用例においても右に概括した情理の語の意味合いを確認することができる。

⑥時會稽剡縣民黃初妻趙打息載妻王死亡。遇赦、王有父母及息男稱・息女葉、依法徙趙二千里外。隆議之曰、「原夫禮律之興、蓋本之自然、求之情理、非從天墮、非從地出也。父子至親、分形同氣、稱之於載、即載之於趙、雖云三世、爲體猶一、未有能分之者也。稱雖創巨痛深、固無讎祖之義。若稱可以殺趙、趙當何以處載。將父子孫祖、互相殘戮、懼非先王明罰、咎繇立法之本旨也。向使石厚之子・日磾之孫、砥鋒挺鏑、不與二祖同戴天日、則石碯・嵇侯何得流名百代、以爲美談者哉。舊令云、『殺人父母、徙之二千里外』。不施父子孫祖明矣。趙當避王期功千里外耳。令亦云、『凡流徙者、同籍親近欲相隨者、聽之』。此又大通情體、因親以教愛者也。趙既流移、載爲人子、何得不從。載從而稱不行、豈名教所許。如此、稱・趙竟不可分。趙雖內愧終身、稱當沉痛沒齒、孫祖之義、自不得永絕、事理固然也。」從之。（『宋書』卷五五 傅隆伝）

⑦義熙五年、吳興武康縣民王延祖爲劫、父睦以告官。新制、凡劫身斬刑、家人棄市。睦既自告、於法有疑。時叔度爲尚書、議曰、「設法止姦、本於情理、非「謂」一人爲劫、闔門應刑。所以罪及同產、欲開其相告、以出爲惡之身。睦父子之至、容可悉共逃亡、而割其天屬、還相縛送、繫毒在手、解腕求全、於情可愍、理亦宜宥。使凶人不容於家、逃刑無所、乃大絕根源也。睦既糾送、則餘人無應復告、並「合從原。」從」之。」（『宋書』卷六六 何尚之伝：「」内は中華書局標点本の校勘に従った。以下同例。）

⑧時沛郡相縣唐賜往比邨朱起母彭家飲酒還、因得病、吐蠱蟲十餘枚。臨死語妻張、死後刳腹出病。後張手自破視、五藏悉糜碎。郡縣以張忍行刳剖、賜子副又不禁駐、事起赦前、法不能決。律傷死人、四歲刑、妻傷夫、五歲刑、子不孝父母、棄市、並非科例。三公郎劉勰議、「賜妻痛「遵往」言、兒識謝及理、考事原心、非存忍害、謂宜哀矜。」覬之議曰、「法移路尸、猶爲不道、況在妻子、而忍行凡人所不行。不宜曲通小情、當以大理爲斷、謂副爲不孝、張同不道。」詔如覬之議。（『宋書』卷八一 顧覬之伝）

⑥⑦は情理で熟して用いられる例、⑧は一連の議論の中で情、理がたがいに連関をもつて用いられる例として挙げた。⑥は息子黄載の妻王氏を殴打、死に至らした母の趙氏が流刑とされるに当たり、被害者の一族から（復讐を避けるため）受刑者を遠ざける律令（「令」とあるが、ここでは具体的には律を指すと思われる）の規定に対し、黄載およびその息子の黄称が人子の義として趙氏に随行すべきを論じ、それが裁決されたものである。議論の中で傳隆は、「礼律」本来の趣旨としてそれが「自然」と「情理」に根ざすこと、したがって三代にわたる親子の一体なるきずなを絶つのは律令本来の趣旨でないことを述べ、さらに「凡流徙者、同籍親近欲相隨者、聽之」との令文（これも律であろう。唐名例律二四条に「父祖子孫欲隨者聽之」とあり）が「大いに情体に通じ」、また孫祖の義を永絶すべからざるは「事理の固より然」れるを主張する。情、理がそれぞれ人情一般、常識的道理の意で用いられていること

は明らかである。

⑦は強盜を働いた男の父が息子を官に告発し、法では一家棄市に処せられるべきところ、父の刑を赦免すべきを論じたもので、ここでも法本来の趣旨を情理に基づくとした上で、家人を棄市に処する規定の本旨が告発の奨励にあり、父子の縁を敢えて忍びわが子を告発した父は「情において慇懃むべく、理としてまた宜しく宥す」べきとされる。情は親子の情、理はやはり常識的道理の意で解してよいであろう。

⑧の例は遺言に従って夫の遺体を解剖した妻の行為が赦前にありながら非常の残忍事であり、かつ律にかかる行為に該当する罰則規定がないため、郡県にて決する能わず朝廷に請讞がなされた、それを承けての尚書都座における議論であろう。妻は夫の遺言にたがい難く、傍らにいながら制止しなかった息子はその分別いまだ十分に理に及ばず、として情状酌量を求める三公郎劉懿に対し、吏部尚書の顧覬之は妻の所業が常人のそれに非ざる不道の行いであり、「宜しく曲げて小情を通ずべからず、当に大理をもつて断をなす」べきだとする。ここでの小情とは妻と息子の心情、大理とは「凡人」の遵うべき世間一般の道理、と見てよからう。こうした理の意味合いは次の西晋末の例における「常理」に端的に表れており、参考までに挙げておく。

⑨元康中、梁國女子許嫁、已受禮娉、尋而其夫成長安、經年不歸、女家更以適人。女不樂行、其父母逼強、不得已而去、尋得病亡。後其夫還、問其女所在、其家具說之。其夫逕至女墓、不勝哀情、便發冢開棺、女遂活、因與俱歸。後婿聞知、詣官爭之、所在不能決。祕書郎王導議曰、「此是非常事、不得以常理斷之、宜還前夫。」朝廷從其議。（『晋書』卷二九 五行志下）

以上、不十分な集成分析ではあるが、ひとまず右に見てきたところから魏晋南朝の司法における情理の語の用いられ方とそのニュアンスを傾向としてうかがうことはできよう。ここに挙げた諸例の他にも南朝の司法における情、理

の用例がいくつかみられるが、それらの例においても右に見てきた情理の意味合いが確認できることのみ触れておくにとどめ、これ以上逐一挙例することはここでは控えておきたい。また北朝においても正史さらには墓誌銘などに多くの例を見出すことができ、それらを通じて右に述べてきたことを大きく修正する必要はないと思われるが、その詳細な検討については機を改めたい。

2. 『晋書』刑法志に見える情理の語と名理学・玄学

さて、前章では具体的実例の中で用いられる情、理の語について見てきたが、『晋書』刑法志にはこれらの語の意味をめぐって次のような注目すべき記載がある。文脈理解の必要上最低限、節略して引用し、便宜上各段落に番号を割り振る。

其後、明法掾張「斐」（原作裴）又注律、表上之、其要曰、：

①夫律者、當慎其變、審其理。若不承用詔書、無故失之刑、當從贖。謀反之同伍、實不知情、當從刑。故失之變也。：

②夫刑者、司理之官。理者、求情之機。情者、心神之使。心感則情動於中、而形於言、暢於四支、發於事業。是故姦人心愧而面赤、內怖而色奪。論罪者務本其心、審其情、精其事、近取諸身、遠取諸物、然後乃可以正刑。仰手似乞、俯手似奪、捧手似謝、擬手似訴、：出口有言當爲告、下手有禁當爲賊、喜子殺怒子當爲戲、怒子殺喜子當爲賊。諸如此類、自非至精不能極其理也。：

③夫理者、精玄之妙、不可以一方行也。律者、幽理之奧、不可以一體守也。或計過以配罪、或化略（以）循常、

或隨事以盡情、或趣舍以從時、或推重以立防、或引輕而就下。公私廢避之宜、除削重輕之變、皆所以臨時觀釁、〔使〕用法執詮者幽於未制之中、采其根牙之微、致之於機格之上、稱輕重於豪銖、考輩類於參伍、然後乃可以理直刑正。：

④王者立此五刑、所以寶君子而逼小人、故爲敕慎之經、皆擬周易有變通之體焉。欲令提綱而大道清、舉略而王法齊、其旨遠、其辭文、其言曲而中、其事肆而隱。通天下之志唯忠也、斷天下之疑唯文也、切天下之情唯遠也、彌天下之務唯大也、變無常體唯理也、非天下之賢聖、孰能與於斯。

これはよく知られているように、西晋泰始四年に頒布されたいわゆる泰始律令に、張斐が注を付けて進奏した上奏文の一節である。冒頭でまず彼は、総則にあたる「刑名」以下、各篇の次第と趣旨について述べ、ついで律上の諸用語の定義を解説する。それに続く①で彼は、「変」、変則的なケースに対して法適用を慎重に行い、事物の根底にある「理」を明らかにすべきをいう（内田智雄氏訳「そもそも律というものは、その変則的なものに心をくばり、その条理を審らかにすべきである」⁽⁵⁾）。

いわば法適用の原則を説いた①の次に、②では審理にあたる者のとるべき姿勢が述べられる。刑とは理をつかさどり、理とは情を求めるかなめ、情とは心に動かされるものである。心が感ずれば情が動き、言となり挙動となり、はては所業に発露する。ゆえに論罪に当たってはつとめて当人の心にもとづき、その情を明らかにし、事実を精査して遠近より範例を取り（『易』繫辭下伝）、そうしてはじめて正しい刑が引き当てられる。挙動として現れた心情を推し測り、正しい刑を当てるには、精細な用心を尽くさねば理を究明することができない。

③は律の働きの根本について論じた部分で、律とは「精玄の妙」なる理、その最も幽玄微妙なるものであるという。様々に状況の異なる事案ごとに柔軟に論罪を判断し、未だ顕現せぬ不軌の萌芽を未然に摘み取り、その隠微なる

悪の軽重と類型を推し量ることによって初めて、理は筋が通り用刑は正しくなるであろう。：

かくして④、易繫辭上伝を模倣したこの段では、律の全体をつらぬく精神として、忠の心に基づく民意への通曉、文雅周到な言辞による事案の断罪、深遠な識見による衆情（天下之情）の斟酌、広大な構想による諸般の実務のカヴァー、そして「精玄な」理による臨機応変の判断が求められる。「天下の賢聖に非ずんば孰か能く斯に与らん」、その精神を具現した泰始律こそは一代の聖典たるにふさわしいであろう。

以上の張斐の議論の中で、情はまず心情、人情の意で用いられているようであり、そのことは②に「心感ずれば情は中に動き」とあることに端的に見て取れる。一方、①「実に情を知らずとも当に刑に従うべし」では具体的事実、事情の意で用いられているようである。情の語における前者と後者の意とが内的関連を持っていたことについてはすでに滋賀氏も次のように説明している。「判断に際して直接対象となる事象だけを孤立させず、背景となる諸事象との具体的関連のなかにおいて同情的に理解し評価するという要請が、「情理」の情に託されている。^⑥」別の言い方をすれば、各事案における事実関係と、その背景にある本人の心的動因、及びそれらを理解する衆人の心情とは密接不可分であったとの一種、主客一体的な観念がそこに横たわっているようにも思われる（犯罪者の心的動機を重んずるいわゆる原心定罪の考えも、こうした観念と無縁ではないであろう）。④の「天下の情」を右では便宜的に人情と訳したが、そこには人情と事情、双方の含意が込められていたとも解せる。

次に張斐の議論中における理の語について見れば、前章で見た諸例とここでの用いられ方とはいささかニュアンスを異にするようである。②に「理は求情の機なり」とあり、そこでの情が先述のように心情と解されるものであれば、それを考究するための機軸たる理とは、事実の背後の心情を洞察する思考の論理、とでもいった意味になろうし、また表面上相い似て動機を異にする案件につき「至精に非ざるよりはその理を極むる能わず」とあれば、その理

とは考究対象たる事実を通貫する論理、といった意味に解せよう。さきの情における主客一体的觀念がここにも見て取れる。③で「理は精玄の妙、一方を以て行う可からざるなり」——事実を律する論理は事案ごとに異なれば、審理者は精密玄妙な用心を以て柔軟に論理的考察を働かせ、事実の動因たる情、心を極めねばならない——とされる理も、また④の「変じて常体なきは唯だ理なり」におけるそれも同様である。前章で挙げた諸例の中で理とはおおむね「常識的道理」といった意味に解されることを先に述べたが、かたや張斐の議論における理はより抽象的・哲学的概念を表す語として用いられているようである。それでは前者と後者との間には何の連関もないのかといえ、決してそうではない。一連の事実における論理を問うべく、審理者の駆使すべき精玄なる論理、それは常識的道理から懸隔してはならない。平凡な一般人の感覚に照らしてはじめて事案の経緯とその心的動因は考究できようし、事の是非を判ずることも許されるはずである。さもなければ、③「幽理の奥」を体現した律が普遍的準則として広く社会を律することができようか。

さて、張斐の理に多分に見られる哲学的傾向が魏晉時代の名理学、玄学と深く関わっていたことについては、易繫辭伝の引用模倣からもうかがい知れるが、王葆玟氏はこの張斐の議を例に挙げ、漢末より盛行し始めた法形式に関する学、いわゆる法理学が強く玄学の傾向を帯びていたことを指摘し、政治学としての法理学・名理学が抽象的な哲学としての玄学へと変化していく過渡的状况をそこに看取している。^⑦また韓樹峰氏は湯用彤氏の指摘を敷衍し、泰始律の形式と内容自体に名理学・玄学の強い影響の見られることを論じている。^{⑧⑨}この時代を代表する名理学者にして、魏律の編纂にも関わった『晋書』刑法志に魏新律の編纂に関わった学者の一人として彼の名が見える）法学者として劉劭がいる。劉劭と法学との関係については湯用彤氏はじめ多くの先学による言及があり、たとえば近年の東川祥丈氏の研究によれば、彼の想定する法には道家的色彩が強く見られ、法・立法家においては自身の道德規準と公的基準^⑩

との合致が求められたとされる。こうした彼の法思想が、社会的通念としての情理の重視につらなるであろうことは自ずと見通せよう。

そもそも情が司法における伝統的な準拠の一つであったことは、「以五聲聽獄訟、求民情」との『周礼』秋官司寇の言葉、また「聖人既躬明愍之性、必通天地之心、制禮作教、立法設刑、動緣民情、而則天象地」との『漢書』刑法志の序文からも明らかである。また道理がそこにもう一つの準拠として意識されていたであろうことも想像に難くない（『韓非子』大体篇「古之全大體者：不逆天理、不傷情性」、制分篇「其法通乎人情、關乎治理也」）。魏晉間における名理学・玄学の盛行は法学思想にも深く影響を与え、こうした従来潜在的に意識されてきたであろう司法の準拠を、概念・言葉として定着させた。以後、この言葉は玄学的な抽象性を払拭しつつ、伝統中国の司法における準拠として明清時代に至るまで沿用されていくことになるのである。

3. 情理の語と礼学議論

情理の語はこの時代、実は司法関係の議論と同程度、あるいはそれ以上にしばしば礼学関係の議論において用いられている。少々例を挙げれば次のようである。

①（西）晉侍中庾純云、「古者所以重宗、諸侯世爵、士大夫世祿、防其爭競、故明其宗。今無國士世祿者、防無所施。又古之嫡孫、雖在仕位、無世祿之士、猶承祖考家業、上供祭祠、下正子孫、旁理昆弟、敘親合族、是以宗人男女長幼、皆爲之服齊績。今則不然、諸侯無爵邑者、嫡之子卒、則其次長攝家主祭、嫡孫以長幼齒、無復殊制也。又未聞今世爲宗子服齊績者。然則嫡孫於古則有殊制、於今則無異等。今王侯有爵土者、其所防與古無異、重

嫡之制、不得不同。至於大夫以下、既與古禮異矣、吉不統家、凶則統喪、考之情理、俱亦有違。按律無嫡孫先諸父承財之文、宜無承重之制。」(『通典』卷八八「孫為祖持重議」；世字はもと避諱で代に作る)

②時有遭亂與父母乖離、議者或以進仕理王事、婚姻繼百世、於理非嫌。尚議曰、「典禮之興、皆因循情理、開通弘勝。如運有屯夷、要當斷之以大義。夫無後之罪、三千所不過、今婚姻將以繼百世、崇宗緒、此固不可塞也。然至於天屬生離之哀、父子乖絕之痛、痛之深者、莫深於茲。夫以一體之小患、猶或忘思慮、損聽察、況於抱傷心之巨痛、懷怛之至戚、方寸既亂、豈能綜理時務哉。有心之人、決不冒榮苟進。冒榮苟進之疇、必非所求之旨、徒開偷薄之門而長流弊之路。或有執志丘園、守心不革者、猶當崇其操業以弘風尚、而況含艱履感之人、勉之以榮貴邪。」(『晉書』卷七九 謝尚伝)

③安帝義熙九年四月、將殷祭。詔博議遷毀之禮。大司馬琅邪王司馬德文議、「泰始之初、虛太祖之位、而緣情流遠、上及征西、故世盡則宜毀、而宣皇帝正太祖之位。又漢光武帝移十一帝主於洛邑、則毀主不設、理可推矣。宜從范宣之言、築別室以居四府君之主、永藏而不祀也。」大司農徐廣議、「四府君嘗處廟室之首、歆率土之祭。若埋之幽壤、於情理未必咸盡。謂可遷藏西儲、以爲遠祧、而禘饗永絕也。」太尉諮議參軍袁豹議、「仍舊無革、殷祠猶及四府君、情理爲允。」祠部郎臧燾議、「四府君之主、享祀禮廢、則亦神所不依。宜同虞主之瘞埋矣。」時高祖輔晉、與大司馬議同。須後殷祀行事改制。(『宋書』卷十六 礼志三)

①は嫡孫が祖のために「持重」具体的には斬續三年の喪に服すべきかを論じたもの。今の世、王侯の爵土を有する者にあつては、いにしえと同じく嫡孫が三年の喪に服し争競の源を防がねばならない。しかし大夫以下、爵邑を有せざる者の嫡孫なれば、そもそも古礼とは同じからざる上、吉事にては一族のことを主宰せず凶事のみにその義務を課するのは「これを情理に考うるに俱に違うるあり」、また律に「嫡孫は叔父たちに先んじて財産分与を受ける」

との規定もなく、ゆえに嫡孫の三年の服喪なかるべし、という。

②は喪乱の中で父母と生別した者が、生死の定かならぬ両親のために喪に服す間、任官・婚姻を避けるべきか否かに関わる議論で、恐らく東晉初年、胡中に没した温嶠の母の改葬を発端に起こった朝議（『晉書』礼志中：「是時中原喪亂、室家離析、朝廷議二親陷沒寇難、應制服不。」）と關係を有するものであろう。仕進は王事のため、婚姻は家の継承のため「理において嫌あらず」とする議者に対し、謝尚は、典礼の本旨が「情理に因循」し、その実施に支障があれば「大義」によって断すべきを述べた上で、家統を絶やさぬことは大事ではあるが、肉親と生別する悲痛これより深きはなく、かかる悲しみを抱いた者が時務を総べうるはずない上、敢えてその中で任官を許せば榮利を貪る弊風をもたらずとして、反対意見を表明する。

③は、五年に二回の祖廟祭祀である十月の殷祭にあたり、四府君すなわち晉皇室の祖たる征西將軍司馬鈞・豫章太守量・潁川太守雋・京兆尹防の神位をいかに処すべきかを論じたもので、各人の主張はあらまし次のようである。司馬徳文…親の尽きたこの四代の神主を別室に蔵し、祭祀の対象とはせぬがよい。徐広…従来廟室の首位に置かれ祭祀を受けてきた四府君の神主を土中に埋めてしまう（これは六十七年前、穆帝永和二年（346）の朝議での意見を指している）のは「情理において未だ必ずしもみな尽くさず」、西の別室に遷蔵した上で祭祀を受け続けるべきである。袁豹…従来通り、殷祠には四府君をあわせ祭り続けるのが「情理にて允ると為す」。臧燾…四府君の神主を四時の亭祀の対象から外す以上、もはや祖霊の依る所ではないゆえ、虞主（葬礼の際の虞祭に用いられる桑製の木主）の例に同じく埋蔵するのがよい（なお彼の議論は『宋書』卷五五本伝に詳しく載せられている）。

以上三例における情理の語は、いずれも情Ⅱ人間の自然な感情、理Ⅱ道理と解して差し支えないであろう。すなわち一章でみた司法に関わる諸例と同様の含意をここでも確認することができる。二章で見たように、魏晉時代の名理

学・玄学の盛行を契機として、「情理」を規準に人間社会のしかるべきあり方を判ずる法・刑上の觀念が定着した。おなじく人間社会に則り、それを律する規範として一方に礼がある。情理の語の司法上の使用と、礼学上の使用とは揆を一にして始まったといわねばならない。言い換えるなら、社会を律する規範としての法・刑と礼との接近、いわゆる礼刑一致の様相を、この語の使用からも見て取ることができよう。

なお最後に、礼学に関連して付言すれば、東晋南朝時代、情理の語が學術討論、いわゆる清談において用いられた例を挙げることができる。

晉陵顧悅之難王弼易義四十餘條、（關）康之申王難顧、遠有情理。（『宋書』卷九十三隱逸 關康之伝）

王濛恆尋（支）遁、遇祇洹寺中講、正在高坐上、每舉麈尾、常領數百言、而情理俱暢。預坐百餘人、皆結舌注耳。（『世說新語』賞譽篇下 注引高逸沙門伝）

前者は王弼易注をめぐる顧悦之との問答において関康之の説が「遠く情理」あつたこと、後者は清談の名手として知られた支遁和尚の講話が數百言のみで「情理ともに暢り」座者を驚嘆せしめたことを伝える。これらの場合の情とは衆情において納得のいく妥当性、理とは道理ないし論理的整合性を指すものと思われる。情理の語が司法や礼学関係のみならず學術上の語としても広く用いられたこと、つまりこの時代の學術・思想の潮流が、礼学や司法觀念とも深く関わり合っていたことが、ここから改めて確認されるのである。

おわりに

司法における情理の語の使用が、魏晋時代の大きな文化的変革と深く関わり合っていたことを本稿では不十分なが

ら述べてきた。稿を結ぶにあたり、推測的に今ひとつ、その社会的背景について考えてみたい。

情理によって民間の紛争や犯罪を裁定する司法のあり方は、裁き手たる地方長官に、民情や社会的常識に応じた柔軟な判断と裁定を要求することになった。前漢後半期から後漢にかけて、地方社会の経済的文化的成熟とともに、各地の風俗、土地柄に沿った循吏的統治が求められるようになり、そのことが各地における地方的教令の流行を生んだことを筆者は以前に別稿で述べたが、こうした地方社会と地方長官との関係が、司法上の言葉として情理が用いられ始めた、そのもう一つの背景としてあるのではなからうか。仮にそう考えることが許されるなら、この語の出現は地方長官と地方社会との距離、より巨視的には国家と社会との関係における変化を示す一つの指標と見ることもできよう。もとよりこうした見通しを司法その他の諸側面から確認するためには、より多くの事例に基づき多角的検討を行う必要がある、今後の課題とせねばならない。

注 (1) 滋賀秀三『清代中国の法と裁判』（創文社、一九八四年）第四「民事的法源の概括的検討」情・理・法―

(2) たとえば宋代の裁判における情理について清代との差異を論じたものとして、佐立治人『清明集』の「法意」と「人情」―訴訟当事者による法律解釈の痕跡―（梅原郁編『中国近世の法制と社会』京都大学人文科学研究所、一九九三年）および同書に対する滋賀秀三氏の書評（『東洋史研究』五二巻四号、一九九四年）参照。

(3) 拙稿「後漢末の弓矢乱射事件と応劭の刑罰議論」（『関西学院史学』四〇号、二〇一三年）

(4) 原心定罪については、日原利国『春秋公羊伝の研究』（創文社、一九七六年）第三章「心意の偏重―行為の評価について―」に詳しい。

(5) 内田智雄編・富谷至補『訳注中国歴代刑法志（補）』（創文社、二〇〇五年）

(6) 滋賀氏前掲書二八六頁。

(7) 王葆玟『正始玄学』（齐鲁書社、一九八七年）第七章四節「理的上昇和義理学的形成」

- (8) 湯用彤『魏晉玄學論稿』（初版：人民出版社、一九五七年）所收「讀《人物志》」
- (9) 韓樹峰「魏晉法律體例的變化與學術風氣之關係」（『中國人民大學學報』二〇〇七年第四期；同氏『漢魏法律與社會』社科文獻出版社二〇一一年に再収）
- (10) 東川祥丈「劉劭の法思想について」（『東方學』第一〇五輯、二〇〇三年）
- (11) 拙稿「漢六朝期の地方的教令について」（『東洋史研究』第六八卷四号、二〇一〇年）